

【氏名】安 成浩

【所属大学院】（助成決定時） 神戸大学大学院総合人間科学研究科

【研究題目】

中国朝鮮族の移動のダイナミックス — 国境を越えた拡散と再結集

【研究の目的】

本研究は、第二次世界大戦後の東アジアにおける国民国家の成立、その後の近代化、特に近年のグローバル化の中で、国家への帰属、民族への帰属の中で揺れ動いてきた朝鮮族の移動のダイナミックスを明らかにすることである。

朝鮮族に関する研究は近年盛んになり、アイデンティティやネットワークなど様々な分野で一定の成果を上げている。しかし、新しい社会現象としての人口の再結集に関する議論はこれまでにあまりされていない。1990年代から朝鮮族は、伝統的な農耕社会から産業社会へと移転し、グローバル化の波に巻き込まれた。人口のおおよそ半数が海外や経済が発達している地域へ移動し、在来朝鮮族村の急速な過疎化をもたらした。その中、朝鮮族村に再び朝鮮族が集まる再結集の動きも出てきた。集中村運動である。再結集の動きはグローバル化の中でこれまでに見られなかった新しい現象であるとも言える。

本研究では以上のような点に着目し、資料調査、フィールドワーク調査を通じて朝鮮族社会の再結集現象を分析し、朝鮮族が移住と定着の選択を迫られ、葛藤の中で再結集を選択していく実態を明らかにする。

【研究の内容・方法】

（研究方法）

本研究は、朝鮮族社会に大きな変化をもたらした社会背景に対する資料による分析と、ミクロなレベルでの現地調査を通じて朝鮮族社会の再結集の経緯や原因を探る形で行った。

ゆえに研究方法は二つに分かれる。第一に、日本、及び現地における資料の収集と分析である。資料の分析を通じてマクロなレベルで朝鮮族の大移動をもたらした政治や社会背景の変化、朝鮮族再結集の原因の分析をこころみた。

第二に、現地調査により、ミクロなレベルで朝鮮族村落の社会史、ライフヒストリを収集し、分析をこころみた。

まず、予備調査として、朝鮮族の再結集が行われている現場を広く回り、再結集の実態の把握をこころみた。

そこから調査地を—黒龍江省海林市新合村に選定し、インタビューと参与観察を並行する形で調査を行った。朝鮮族が出稼ぎによる拡散から再結集に至った経緯や意識の変化などをミクロなレベルで調査、分析をこころみた。

最終的に、マクロとミクロの分析を接合することによって再結集の実態究明をこころみた。

(研究内容)

2006年3月：資料収集と予備調査

中国国家図書館、延辺大学図書館及び書店で資料の収集を行った。そして北京、長春及び延辺の朝鮮族研究者に対するインタビューを通じて中国国内における朝鮮族の研究状況、集中村運動に対する見解などを把握することができた。

中国東北の遼寧省の満融村、吉林省の金豊村、黒龍江省の紅新村、延辺朝鮮族自治州の朝陽村など計14の村を回り、予備調査を行い、伝統的な朝鮮族村における拡散や再結集の実態把握をこころみた。そして朝鮮族村に於ける集中村運動の位置づけなど実態を把握することができた。

2006年8月：本格調査

黒龍江省新合村における拡散と再結集に関するフィールドワーク調査を開始。初期段階においては、集中村運動の成功の印ともいえるアパート団地の建設の経緯やその背景に関する調査を行なった。次の段階ではインタビュー調査を中心に、再結集の背景となる朝鮮族の出稼ぎ、出稼ぎから戻ってくる経緯や、新合村に結集してくる原因などの究明をこころみた。

【結論・考察】

(考察)

朝鮮族の再結集の動きは、エスニック・コミュニティとしての朝鮮族の意思の現れとして位置付けることができる。ゆえに、二つの側面から考察することができる。

第一の側面は、コミュニティを維持しようという動きである。朝鮮族村は、かつて朝鮮族の経済、文化、教育の基盤であった。集中村運動は、一部の朝鮮族リーダーたちが、急速な過疎化に苦しんでいる朝鮮族村を何とか救おうとする生存戦略として捉えることができる。朝鮮族村を生かすことによって、朝鮮族のコミュニティを温存させようとする動きである。

第二の側面は、エスニシティを維持しようとする動きである。集中村を通じて、コミュニティを維持することによって、マイノリティとしての独自の文化、教育、経済を発展させ、朝鮮族のエスニシティを維持しようとする動きである。

再結集の個人的要因として経済要因、教育要因、コミュニティなどを挙げられることができる。その何れも個人がコミュニティやエスニシティを求めようとする動きであった。

したがって、朝鮮族の再結集の動きは、グローバル化の波の中で、朝鮮族のエスニック・コミュニティの再構築の過程として捉えることができる。

また、再結集をもたらす朝鮮族の国境を越えた拡散の背景には、近年の産業化、都市化、グローバル化の中での人の移動として認識できる。中国東北部と沿海地域、韓国との経済格差、中韓経済交流の拡大が、架橋の役割を果たす朝鮮族の拡散に拍車をかけたのである。